

笑輝祭・体育の部

みんなが主役の行事を創ろう

笑輝

第7号
加賀中学校
校長室

「みんなで跳んだ」に学ぶ

運動会シーズンになると今でも思い出す教育実践があります。それは、「みんなで跳んだ」です。この実践は、神奈川県小田原市のある中学校で、運動会の学級対抗大縄跳びをめぐる実際にあった小さな物語のことです。

この小さな物語は、1997年11月に朝日新聞の夕刊に掲載されたコラム記事により、広く知られるようになりました。その後、テレビで紹介されたり、本として出版されたり、道徳の読み物教材に採用されたりしている教育実践です。

私がこの小さな物語を教育実践と呼んでいるのは、初めてこの実話に出会ったのが、ある教育雑誌であったからです。実は、この教育実践を生んだ担任の柏木修先生は、非常に優れた生徒指導に関する研究を進めている方でした。先生の教育論文等から感じられた、生徒への温かいまなざし、生徒の声を大切にする学級づくりなどは、当時の私のつたない実践にも、大きな影響を与えてくれました。

柏木先生でなければ、いや、柏木先生の学級だからこそ、「みんなで跳んだ」は、生まれたと私は考えています。

では、どんな教育実践なのか、当時の生徒たちの班ノートの記述も引用されているコラムを紹介したいと思います。生徒のみなさんも、この小さな物語が、多くの人の

感動を呼ぶのはどうかを考えながら、読んでください。(約30年前のできごとですが・・・)

9月21日晴れ・・・運動会前日

「大縄跳びで、彼を外すのはいやなんです」。ある中学校の運動会の前日。先生にクラスの一人が言ってきた。長さ20メートルほどの縄をクラス全員で跳び、合計回数を競う。でも、ぼくだけが跳べない。一人で、次に2人で練習した。みんなから声もかけてもらった。なお引かなかった。一緒に跳ぶのが平等なのか。外すのがいやなのか。先生は迷いながら、彼を声かけ役にしていた。

みんなで放課後に話し合った。一人ずつ意見を言う。36人中「勝てなくなるから入れない」が13人、「チームワークが大切だから一緒に」が11人。

後半にだけ入れる折衷案が出た。「これから落ち着くか」と思った先生は採決した。ところが、「反対」が23人。「彼には全部でないよりつらい」「みんながバラバラになってくのはイヤ」。

さらに「跳びたくないの」って彼に聞いた。「ぼくは跳びたい」。

「勝ち負けなんて」。拍手が大きくなる。「本音か。それでいいのか」。先生は涙声になっていた。全員が「みんなで跳びたい」に手をあげた。

9月22日雨・・・順延

・・・あのとき「跳びたい」と言ってくれて、ホッとしました。もし「跳びたくない」というのなら、こんな会議なんかできなかつたと思うし・・・。

みんなの泣き顔、まだ頭の中から離れない。あつ、そうそう、先生の泣き顔、おかしかったな。先生、必死になって泣くのをやめようとして。あーゆー時は泣いていいのに。

9月23日晴れ・・・運動会当日

本番では、5クラス中のビリだった。それでも、彼は初めて続けて跳べた。友達と手をつないで、次は一人で、全部で71回跳んだ。

彼は後で作文に書いた。「今日のぼくは絶好調でした。大縄では絶好調でした。ぼくには自信がありました。とびはねるほどうれしいです」。

心配でみんなの足元ばかり見ていた先生が、ほかの生徒の作文で知ったことがある。

「みんな、跳びながら泣いていました」。

この小さな物語を知った多くの人は、胸に熱いものがこみ上げてきたという感想を言います。どこに感動しているのでしょうか。

能力に関わらず、全員が同じことをすること、自分なりに頑張ればみんな違ってよいこと、一人ひとりの思いの違いを尊重し、納得解を導き出したプロセス、勝つことが最上位の価値ではないことを示したことで、差異ある他者の参加の仕方考えたこと。生徒のみなさんなら、どう答えるのでしょうか。また、教えてください。

さあ、今週末5月29(金)は、笑輝祭・体育の部です。先週、結団式も行われましたが、みなさんのやる気を感じました。素晴らしい行事になりそうです。みんなが主役になれる行事を共に創り上げましょう。